

<報告>

海外研修が international posture に与える影響： 群馬大学第9回理学・作業療法学専攻アメリカ研修の報告

下 田 佳央莉・久留利 菜 菜・齋 藤 貴 之

要 旨

我々は群馬大学第9回理学・作業療法学専攻アメリカ研修を実施し、参加者には研修の前後で international posture (Yashima2002, 2009) のアンケート調査を行った。その目的は、本研修が international posture に与える影響を評価するためである。International posture とは国際社会に対する総合的な態度であり、日本の学習者における英語の学習と会話に影響する。アンケートは28項目の質問により構成され、intercultural approach (-avoidance) tendency、interest in international vocation、ethnocentrism、interest in foreign affairs、having things to communicate の5つのカテゴリに分かれる。6名の学生が University of Puget Sound で講義に参加し、学内実習を見学し、関連施設を訪問した。参加者はプレゼンテーション発表の機会を持つと共に、現地の学生との課外活動や、ホームステイ等も経験した。研修の前後で、international posture をカテゴリ毎に見ると変化は無かったが、intercultural approach (-avoidance) tendency と ethnocentrism の1つずつの項目で有意な増加があった。この結果は、本研修での学びが、参加者の international posture に影響を与えた可能性を示す。今後は多数例での検討により、短期海外研修の効果を検証したい。

【キーワード】 海外研修、international posture、学生、理学療法、作業療法

1. はじめに

群馬大学医学部保健学科はカリキュラムポリシーに「保健医療の諸課題に対応できる地域的視点と国際的視野を持つ人材育成を図る教育」を掲げている(群馬大学2019)。本学の理学・作業療法学専攻でも、2001年からほぼ隔年でアメリカ合衆国ワシントン州にある University of Washington (以下 UW) と University of Puget Sound (以下 UPS) 及び両大学の関連施設で研修を行っている。今回、2019年3月に9回目の研修を実施した。そして、本研修が international posture (国際的志向性。以下 IP) (Yashima2002, Yashima2009) に与える影響を評価するため、研修の前後で、参加者に対し IP のアンケート調査を行った。

日本において、英語は学習者を外国や外国人と結び付ける、世界を象徴するものである (Yashima2002)。しかし、英語に対する興味や英語という言葉が象徴するものへの好意的な態度 (国際的な仕事をする、異文化の人々と接触するなど) には個人差がある (Yashima2002)。この志向性を Yashima は IP と呼び、IP は国際社会に対する総合的な態度であり、日本の学習者における英語の学習と会話に影響すると説明している (Yashima2002, Yashima2009)。その28項目版は5つのカテゴリに分かれ、intercultural approach (-avoidance) tendency : 7 項目、interest in international vocation : 6 項目、ethnocentrism (reaction to different customs/values/behaviors) : 5 項目、interest in foreign affairs : 4 項目、having things to communicate (willingness to communicate to the world) : 6 項目により構成される (Yashima2002, Yashima2009, 八島2015)。我々は上記の特徴を持つ IP の変化を、統計学的手法を用いて検討することは、本研修の成果を捉えることに繋がると考えた。

今回、本研修内容及び研修が参加者の IP に与えた影響について報告する。

2. 活動内容

2. 1. 研修参加者

本研修へ申込み、参加をしたのは理学・作業療法学専攻に所属する2・3年生の計6名であった。

2. 2. 研修前の活動

研修の担当教員は2018年9月から UW・UPS のコーディネーターと日程調整を進めたが、UW とは日程が合わず、今回の訪問は UPS のみとなった。UPS のコーディネーターには、参加者からの研修内容の希望を伝えた。

参加者は、2018年10月からプレゼンテーションの準備を始め、およそ月2回の頻度で1回約90分間のミーティングを開催した。参加者のプレゼンテーションは「Language, Culture, and Exercise」 「Gunma Prefecture」、 「School Life at Gunma University and University Hospital」 の3演題であった。2019年3月初旬に、学内でプレゼンテーションの予演会を行った。

2. 3. 研修日程と内容

日程は2019年3月10日から18日の9日間で、11日から15日は UPS で講義に参加し、学内実習を見学し、病院等の関連施設を訪問した。12日に UPS の学生・教員を対象にプレゼンテーションを行った。その他に、現地の学生との課外活動や、週末のホームステイ等も経験した。なお、上記の研修日程及びその詳細な内容は報告書 (群馬大学医学部保健学科理学・作業療法学専攻2019) にまとめた。

2. 4. 研修後の活動

参加者は2019年5月開催の本学医学部保健学科の学生・教員向けの報告会への準備を進めた。9月には日英併記の報告書（群馬大学医学部保健学科理学・作業療法学専攻2019）を完成させた。

3. 研修が参加者の IP に与えた影響

研修前の2019年1月16日と、研修後の3月20日に、28項目の IP の質問（Yashima2002, Yashima2009, 八島2015）を Google Form で参加者のメールアドレスに送信した。参加者は自由意思で質問に回答し、返送した。倫理的配慮として、回答者にはアンケート調査について説明し、その結果を発表することについて、全員から署名で同意を得た。統計解析は専門家の助言を受けながら実施した。研修前後の IP の変化は、カテゴリ・項目毎で、Wilcoxon の符号付き順位検定により解析した。統計解析ソフトには IBM SPSS Statistics 25 を用いた。

結果としてアンケートに回答した人は参加者全員の6名であった。研修前後の IP は、カテゴリ毎では有意な変化が無かった。項目毎の変化を見ると、intercultural approach (-avoidance) tendency に関する質問項目“留学生や外国人の学生と寮やアパートなどでルームメートになってもよいと思う。”と ethnocentrism に関する質問項目“習慣や価値観の異なる人と協力して物事をするのは楽しい。”には有意な増加があった ($p = 0.046, 0.034$) (表1)。

4. 成果と今後の課題

英語圏での10日間の語学研修が日本人中学生に与えた効果を IP (20項目版) によって評価した報告では、2つのカテゴリで IP が研修後に有意に増加した (Leis2015)。また、英語を学ぶ大学生が、3ヶ月間の語学研修を経験した群では、未経験の群と比べて having things to communicate のカテゴリの中の一項目である“世界の人々と話したい内容を多くもっている”が有意に高かった (Geoghegan2018)。これらの報告は、語学研修の効果は IP のカテゴリまたは小項目の変化から評価できる可能性を示すものである。本研修は、IP (28項目版) のカテゴリには有意な変化を与えなかったが、intercultural approach (-avoidance) tendency と ethnocentrism の中の1つずつの項目には有意な変化を与えたことから、本研修での学びは、参加者の英語に対する興味や好意的な態度を高めた可能性がある。その理由として、有意差のあった項目から、講義や実習に加え、UPS の学生らと課外活動・ホームステイ等を通じ、異文化交流ができたことが挙げられる。また、事前準備を経て臨んだプレゼンテーション発表での質疑応答も、価値観の異なる人からの意見の受容を促した可能性がある。

今回は理学・作業療法学専攻学生の少数例の検討であったが、今後は他の短期海外研修も含めた多数例で検討したい。本学の医学部保健学科・保健学研究科は、専門性の高い短期海外研修を多く実施

している。授業と両立しやすく、費用も低い短期海外研修は、学生にとって留学の足掛かりとなりやすい。IP という、参加者の英語学習の動機づけに結び付き、その習熟度やコミュニケーション行動に影響を与える客観的な評価指標 (Yashima2002,Yashima2009) を、今後は英語能力試験等と併せて研修前後で評価することで、短期海外研修の効果が明らかになれば、本学にとって意義深く、グローバルな保健医療人材の育成にも寄与できると考える。

謝 辞

UPS の教職員・学生の皆様、本学の後援会、同窓会、教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 群馬大学. (2019). 入試案内. http://www.gunma-u.ac.jp/admission/adm001/adm001_001/g2095
- Yashima, T. (2002) . Willingness to Communicate in a Second Language: The Japanese EFL Context. *Mod Lang J*, 86, 54-66.
- Yashima T. (2009) . International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL Context. In Dörnyei Z & Ushioda E (Eds.) . *Motivation, language identity and the L2 self* pp 144-163. Clevedon: Multilingual Matters.
- 八島智子. (2015). 研究活動. <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~yashima/data/kokusai.pdf>
- 群馬大学医学部保健学科理学・作業療法学専攻. (2019). 第9回 理学・作業療法学専攻アメリカ研修 報告書 pp 1-72.
- Leis A. (2015) . Study Abroad and Willingness to Communicate: A Case Study at Junior High School. *TLT*, 39, 3-9.
- Geoghegan L. (2018) . International posture, motivation and identity in study abroad. In Pérez-Vidal C, López-Serrano S, Ament J, & Thomas D.J. (Eds.) . *Learning context effects: Study abroad, formal instruction and international immersion classrooms* pp 215-253. Berlin: Language Science Press.

表 1 参加者の international posture (Yashima2002, Yashima2009, 八島2015) の変化

カテゴリと質問項目	研修前		研修後		p値
	median	range	median	range	
Intercultural approach (avoidance) tendency					
1. 日本に来ている留学生など外国人と(もっと)友達になりたい。	5.5	4-6	5.0	4-6	1.000
2. 外国の人と話すのを避けられれば避ける方だ。	4.0	4-5	4.0	4-5	1.000
3. 日本の学校で留学生がいれば気軽に声をかけようと思う。	4.0	3-5	4.0	4-6	0.083
4. 留学生や外国人の学生と寮やアパートなどでルームメートになってもよいと思う。	5.0	4-5	6.0	4-6	0.046*
5. 日本で地域の外国人を世話するような活動に参加してみたい。	4.5	4-5	5.0	4-6	0.180
6. もし、日本で隣に外国の人が越してきたら困ったと思う。	4.5	4-6	4.5	3-6	1.000
7. 日本で、レストランや駅で困っている外国人がいれば進んで助けると思う。	5.0	4-6	5.0	4-6	0.317
Interest in international vocation					
8. 故郷の街からあまり出たくない。	3.5	2-6	4.0	2-6	0.317
9. 外国で仕事をしてみたい。	4.5	3-5	4.5	3-6	0.317
10. 国連など国際機関で働いてみたい。	4.0	2-4	4.0	2-5	0.157
11. 国際的な仕事に興味がある。	5.0	3-5	5.0	3-6	0.480
12. 日本の外の出来事は私たちの日常生活にあまり関係ないと思う。	5.0	4-5	5.0	4-6	1.000
13. 海外出張の多い仕事は避けたい。	4.0	2-6	4.0	2-6	0.655
Ethnocentrism (reaction to different customs/values/behaviors)					
14. 外国の人の言動に違和感を感じることがある。	3.5	2-5	2.0	1-5	0.059
15. 自分と習慣や価値観の異なる人より似た人につきあう方が好きだ。	5.0	4-6	4.5	3-5	0.129
16. 習慣や価値観の異なる人と協力して物事をするのは楽しい。	4.5	3-6	6.0	4-6	0.034*
17. 自分に似た考え方、価値観をもった人と一緒に仕事をしたい。	4.5	4-6	4.0	2-5	0.157
18. 習慣や価値観の異なる人は苦手だ。	3.0	2-4	3.0	1-4	0.414
Interest in foreign affairs					
19. 外国に関するニュースをよく見たり、読んだりする。	3.5	1-4	3.0	2-5	0.739
20. 外国の情勢や出来事について家族や友人とよく話し合うほうだ。	2.5	1-5	1.5	1-5	0.480
21. 国際的な問題に強い関心をもっている。	3.5	1-5	3.0	2-5	0.564
22. 海外のニュースにはあまり興味がない。	4.0	3-6	3.5	2-6	0.655
Having things to communicate (willingness to communicate to the world)					
23. 世界の人々と話したい内容を多くもっている。	4.0	3-4	4.0	2-5	1.000
24. 世界に向かってアピールしたいことがある。	3.0	1-5	4.0	2-4	0.317
25. 環境問題や南北問題などについて意見をもっている。	3.5	1-4	3.5	2-6	0.194
26. 世界の人々と話すとなると何を話してよいかわからない。	2.0	1-4	3.0	2-4	0.059
27. 国際的な諸問題について特に意見はもっていない。	4.0	1-4	3.0	1-5	0.705
28. 外国人の友人と話したいことがたくさんある。	4.0	4-6	5.0	4-5	0.317

Note. N=6, *p < .05.

Effects of overseas study tour on international posture:
A report on the ninth US study tour for physical and occupational therapy
students at Gunma University

SHIMODA Kaori, KURURI Nana, SAITOH Takayuki

We conducted the ninth US study tour for physical and occupational therapy students at Gunma University in March 2019. A questionnaire survey, designed to evaluate the effects of the tour on international posture (Yashima2002, 2009), was administered before and after the tour. International posture is a general attitude toward the international community that influences English learning and communication among Japanese learners. The questionnaire consisted of 28 items and was divided into 5 categories: intercultural approach (-avoidance) tendency, interest in international vocation, ethnocentrism, interest in foreign affairs, and having things to communicate. Six students participated in the tour, after preparation. They attended lectures and observed clinical practice at the University of Puget Sound. The students visited university-associated health institutions. They gave presentations to the students and faculty. They also participated in extracurricular activities and stayed with a homestay host over the weekend. There were no significant score changes among the categories of international posture. However, one item on intercultural approach (-avoidance) tendency and one on ethnocentrism significantly increased. The results suggest that the tour affects international posture. There were few subjects, and all were physical or occupational therapy students. In the future, we will evaluate the effects of a short-term overseas study tour with a larger sample.